

# 学校独自の「BeLノート」で 自己理解と職業理解を深め、 進路を主体的に選択する

## ▶ 北村山高校(山形・県立)

取材・文／笹原風花

### 進路指導の課題とテーマ

大石田高校と尾花沢高校が統合され、1987年に山形県内で初めての統合高校として開校した北村山高校。スポーツが盛んで、特にスキー部はインターハイなどの全国大会で、度々優秀な成績を収めてきた。2007年に総合学科に改編され、現在は、大学・短大や専門学校への進学を希望する生徒が主に学ぶ「文理総合系列」、スポーツに力を入れる生徒が学ぶ「体育総合系列」、保育や被服、調理に関心の高い生徒が学ぶ「生活総合系列」の3つの系列からなる。少子化の影響を受け、近年は生徒数が減少。募集時の定員は120人だが、定員割れの状況が続いている。

年度により波があるが、例年、年次\*の半数ほどが就職を希望。進学希望者、就職希望者とも地元志向が強い。大学・短大、専門学校への進学から、民間企業就職、公務員就職まで、生徒の多岐にわたる進路をきめ細やかな指導で支えてきた。2018年度には、「キャリア教育優良学校」として文部科学大臣賞を受賞。地元企業・団体や市・町など外部と連携しながら活発なボランティア活動や課題解決型学習を行い、系統的・体型的なキャリア教育に取り組んでいることが評価された。一方、ここ数年は、生徒数減に伴い教員の数が減少。進路指導においては、限られた人員でいかに質の高い指導を継続するかが課題となっている。

### 「自分」と「仕事」への 理解を深める1年次

伝統的にキャリア教育に力を入れてきた北村山高校。その軸となり、進路指導のツールとしても活用されているのが、学校独自の教材「BeL(ベル)ノート」だ。BeLは「Beautiful [ite]」を略した造語で、そこには「より豊かな人生を送るための学びを」という思いが込められている。同校に赴任して6年目、今年度より進路課長を務める大沼友紀先生は「BeLノートは、2007年に総合学科に改編されたのを機に始まった取組。以来、本校に脈々と受け継がれてきたもので、これがあるからブレない進路指導が可能になっている」と言う。

BeLノートは、各年次用に1冊ずつ、

3年間を通して3冊ある。1年次には、学校設定科目「産業社会と人間」の授業において使用する。

「1年次には、進路やキャリアに関わる基本的な部分を探っていきます。自分の生い立ちからこれまでを振り返り、この先どういう進路を歩みたいか、将来どうなりたいか、そのためには今何をやるべきか：まで掘り下げていきます。加えて、世の中にはどういう職業があるのか、働くとはどういうことか、どんな働き方があるのか：といったことも学んでいきます。頭の中で考えたこと、社会人の方の講話などを聞いて感じたことをBeLノートにアウトプットすることで、より能動的に自己分析や職業理解に取り組めるようになることを目指しています」

1年次の終わりには、集大成として

### ◎進路状況(2021年3月実績)

大学進学3人、短大進学4人、  
専門学校進学16人、就職44人  
その他(受験準備など)3人

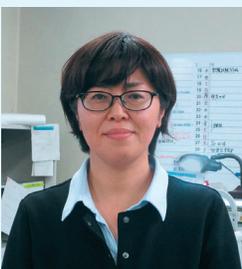
2020年度はコロナ禍のなかの就職活動だったが、先生方の予想に反し、進学への進路変更者は少なく、就職者が多い結果となった。なお、就職者のうち85%弱が県内の事業所に就職している。

### ◎School Data

1987年開校/総合学科(文理総合系列・体育総合系列・生活総合系列)/生徒数167人(男子53人・女子114人)

「ライフプラン発表会」を実施。パワーポイントでまとめた資料を用いて、生徒一人ひとりが自分のライフプランを発表する。さらに、クラス内で選ばれた数名は、全校生徒の前でも発表を行う。大沼先生は、こうした1年次の指導がとても重要だと考える。その理由はこうだ。

「生徒には、自分に対する思い込みを払拭して、自信をもってほしいんです。自分のいいところを挙げてもらい、と、



進路課長  
大沼友紀先生



感想文としてお世話になった経営者の方々に送付している。

「2年次後半には5コースに分かれますが、1コースに一人の教員を充てられなくなり、教員が複数のコースを掛けもちしているのが現状です。教員の人数が減ったことで生徒に不利益を与えてはいけません。進路指導の質は絶対に下げられない、でも、先生方の負担もこれ以上大きくはできない。やり方を工夫するだけでなく、やるべきことやらなくてもいいこととの精査も必要だろうと感じています」

### 自己理解を深めることが次のステージにつながる

3年次の「Bellの時間」は、2年次後半から引き続きコースごとの学びで、志望理由書の書き方、小論文対策、面接試

験対策、SPI対策など、コースの特性に応じたより実践に即したものになる。

1・2年次生のBellノートは書き込むスペースが多いワークシート型中心だったのに比べ、3年次生用のBellノートは資料集的な意味合いが強い。進学や就職に関する最新の情報が掲載されており、毎年、更新されている。

また、コースごとに企業見学会やキャリアアップセミナー、夏期講習なども多数実施している。今年の夏に実施した外部講師による面接講座の終了後、大沼先生は講師から「生徒たちは予想以上に面接がうまかった。がんばればもっと伸びるよ」と激励されたという。

「うれしい驚きでした。生徒が自分をしっかりと分析・理解できていることが大きかったのではないかと思います。今年の3



企業見学会では、地元の事業所の協力を得て、さまざまな職場を訪れる。

## 成果と課題

### 生徒を最優先にしつつ、持続可能な進路指導を目指す

年次生はコロナ禍の影響でインターンシップに行けなかったのですが、就職担当の東海林啓教諭作成のオリジナルの自己分析シートなどを使って生徒の自己理解を促す指導を手厚くしてくれたんです。それがこうした結果につながったのではないかと思います」

段階を追って少しずつ自己理解を深め、自分がやりたいこと、進みたい道に向かって歩を進める生徒たち。「3年間で通じた成長の基盤は、学校生活全体にある」と、大沼先生は言う。

「進路選択にあたり、もっとも重要なのは自分を知ること」と強調する大沼先生。自己分析・理解ができている生徒は、「志望動機や根拠を、自分の言葉で語れるようになっていく」と言う。一方、成果は同時に課題でもあり、まだ自分を掘り下げきれない生徒もいる。

「今後の課題は、1年次の指導をこれまで以上に丁寧にしていくこと。教員が手をかけなくとも能動的に動ける生徒ばかりではないし、むしろなかなか最初の一步が踏み出せない生徒が多い学校です。できるだけ生徒と顔を合わせて、時間や手間をかけて、信頼関係を築くなかで指導をする必要があると感じています」

そこで再び課題になるのが、教員の人手不足だ。大沼先生が進路課長に就いた今年度

「人間関係に悩んだけど解決できた、部活での挫折を乗り越えた、努力して成績が上がった、授業で先生に褒められた：そうした経験値が生徒の自信になり、成長につながるのだらうと思います。進路関係の情報や体験は、いわばそうした日常への「スパイス」。何かに気づいたり、ちょっと違った見方ができたり、そんなきっかけになるものだと思います。進路課として何ができるのか、生徒にどんな刺激を与えられるのか、これからも考え続けていきたいです」

は、取組を精査するために、「まずは全部やってみる」という年に位置づけた。そのうえで、必要なものとそうでないものを見極め、仕組みを変えることで簡素化できる部分がないかなどを検証する予定だ。

「現状のままでは続けることには無理があるので、例えば5つに分けているコースを一部統合する、全コース共通の部分を増やすなど、変革をしていく必要があります。これにより、進路の方向性を決めかねている生徒、気持ち揺れている生徒にとっては、視野が広がる、柔軟に進路変更ができるというメリットもあるでしょう。進路指導やキャリア教育の年間計画も含めて、生徒のためになるかどうかという価値基準を最優先しつつ、新しいものを作り替えていきたいと思っています」

質の高い、かつ、持続可能な進路指導を求めて、北村山高校の挑戦は続く。